

文学分野

「 翻 訳 」 の 諸 相

研究班代表

若島 正

はじめに

吉田 城

「翻訳」の諸相 研究班に所属する第2研究班は、主としてフランス文学・フランス芸術を研究するメンバーから構成され、広い意味における「翻訳」すなわち異文化とどのように接触し、それを同化吸収するか、あるいは批判的に受容するかといった問題を考究してきた。2003年夏に創設されて以来、3回の研究集会と1回の国際シンポジウムを開催して、興味深い研究成果をあげてきた。今回の報告書にまとめたのは、その一部にすぎないが、研究班の意図を十分に示した論文集と言えよう。

班の責任者吉田城は、明治大正期の日本文学において顕著に見られる西欧文化と伝統文化の拮抗および融合の問題を芥川龍之介のいわゆる「開化もの」のテクストに探った。永盛克也はロラン・バルトと演劇の問題を通じて、ギリシア演劇およびブレヒトの演劇論がいかに批評家バルトの前半生における重要なモメントになったかを緻密に検証した。パリ第3大学のピエール＝エドモン・ロベール教授(文学研究科客員教授)は現代の小説ジャンルにおけるドキュメンタリー性などの新傾向について、2本の論考にまとめた。

早川文敏は作家ルイ＝フェルディナン・セリーヌの生き方を通じて、第2次世界大戦時の対独協力者の問題を歴史的に概観した。小黒昌文は、20世紀初頭において制度としての美術館が、文化の越境とどのような関係にあるかを、パレス、プルーストラの仕事を通じて明らかにしようと試みた。林田愛は19世紀の医学者・科学者たちにおける動物実験への態度を調査し、エミール・ゾラの晩年の科学主義に対する反省と考察を浮き彫りにした。吉川順子はジュディット・ゴーチエの和歌翻訳アンソロジー『蜻蛉集』をコーパスとして、詩歌の外国語翻訳の問題点と興味を研究した。

これらの論文を通覧すると、自らと異なる外国の文化ないし言語をまず「他者」として受け入れ、それを独自の美的・哲学的・文学的基準に

衝突させ、そこから新しい価値を創造していったようすが浮かび上がってくるように思われる。本研究班のプロジェクトはまだ端緒にいたばかりであるが、今後も着実な成果を上げていきたい。